黒ねこ作
illust.ただのサボテン
KANTAI COLLECTION FANBOOK
艦隊これくしょん
瘴霧の魔物(下)
シャドウフリート
4

KANTAI COLLECTION FANBOOK

SHADOW FLEET 4

－ 瘴霧の魔物（下）－

黒ねこ作

表紙・挿絵／ただのサボテン

目次

第五章　瘴霧の魔物　【012】

第六章　不知火　【052】

第七章　揺るがぬ覚悟　【102】

第八章　約束　【154】

エピローグ　【252】

あとがき　【260】

民間軍事会社『海神』の遊撃艦隊群。
それが〝影の艦隊〟である。
あらゆる理由と事情を抱えた艦娘が『海神』に雇われたとき、
彼女達は〝傭兵艦娘〟となり報酬のために命を賭ける。

『海神』遊撃艦隊群/第一艦隊

【陽炎(改二)】
第一艦隊の傭兵艦娘、天龍の部下

【不知火(改)】
第一艦隊の傭兵艦娘、天龍の補佐

【天龍(改)】
第一艦隊の傭兵艦娘、最前衛の斬り込み役

【長門(改二)】
第一艦隊の旗艦、遊撃艦隊群の総旗艦、提督代行

【古鷹(改二)】
第一艦隊の傭兵艦娘、提督代行の秘書艦

【加賀(改)】
第一艦隊の傭兵艦娘、エアカバー担当

『海神』遊撃艦隊群/第二艦隊

【摩耶(改二)】
第二遊撃艦隊の旗艦、古参の傭兵艦娘

【他三名】
吹雪(改)、金剛(改二)、比叡(改二)、飛龍(改二)、蒼龍(改二)

『海神』遊撃艦隊群/第四艦隊

【木曾(改二)】
第四遊撃艦隊の旗艦、遊撃艦隊群の作戦参謀

【時雨(改二)】
第四遊撃艦隊の傭兵艦娘、夕立の姉艦

【夕立(改二)】
第四遊撃艦隊の傭兵艦娘、時雨の妹艦

【他三名】
電(改)、伊58(改)、伊19(改)

〝海神〟医療班

【氷川丸】
強襲揚陸潜水艦〝海神〟の医療班主任、元衛生艦娘

『海神』技術開発課/資材調達課

【明石(改)】
強襲揚陸潜水艦〝海神〟整備班の班長、技術開発課の課長

【夕張(改)】
資材調達課の課長、技術開発課の次長

『海神』対外調査課

【青葉(改)】
対外調査課の課長、『海神』随一の情報通

【初春(改二)】
対外調査課の主任、荒事専門の護衛担当

【若葉(改)】
対外調査課/別室の調査員、技術担当

『海神』警備課

【初霜(改二)】
警備課の別室担当、初春と若葉の妹艦

『海神』本社

【來栖 誠二 （クルス セイジ）】
民間軍事会社『海神』の社長、元帝國海軍少将

大神重工業

【天野 良之 （アマノ ヨシユキ）】
大神重工業の艤装技師、改装陽炎型の開発主任

【槇野 茂 （マキノ シゲル）】
特殊造船部/艤装開発一課の課長、ベテランの艤装技師

【鹿島（改）】
大神重工業の社長秘書。元帝國海軍の艦娘。

幌筵泊地/第十七駆逐隊

【浜風（改二）】
第十七駆逐隊の旗艦、陽炎と不知火の妹艦

【他三名】
浦風(改二)、磯風(改二)、谷風(改二)

日本帝國海軍/幌筵泊地

【後藤　英介　（ゴトウ　エイスケ）】
幌筵泊地の総司令官、帝國海軍少将

【神通（改二）】
後藤の秘書艦、第二水雷戦隊の旗艦

幌筵泊地/第十八駆逐隊

【霞（改）】
帝國海軍の艦娘。第十八駆逐隊の先任

【霰（改）】
帝國海軍の艦娘。第十八駆逐隊の一員

幌筵泊地/第十七駆逐隊

【浜風（改）】
第十七駆逐隊の旗艦、陽炎と不知火の妹艦

【他三名】
浦風(改)、磯風(改)、谷風(改)

日本帝國海軍/参謀本部第五部/特務艦隊

【霞(改二)】
第一特務艦隊の旗艦。元幌筵泊地の第十八駆逐隊

【霰(改二)】
第一特務艦隊の旗艦補佐。元幌筵泊地の第十八駆逐隊

【朝潮(改二)】
秘書艦代理、第一特務艦隊の一員

【他三名】
満潮(改二)、荒潮(改二)、大潮(改二)

【大淀(改)】
帝國海軍の艦娘、『海神』を監視する特務監察艦

【日向(改)】
第二特務艦隊の旗艦、元連合艦隊所属の航空戦艦

【佐久間 玲 (サクマ レイ)】
海軍参謀本部第五部の部長、帝國海軍少将

ソビエト共和国連邦海軍/海軍特殊艦隊

【ガングート(改二)】
ソ連海軍の艦娘、海軍特殊艦隊の旗艦

【ヴェールヌイ】
ソ連海軍の艦娘、ガングートの第一秘書艦

【タシュケント(改)】
ソ連海軍の艦娘、ガングートの第二秘書艦

アメリカ海軍/第 13 任務部隊『アビス』

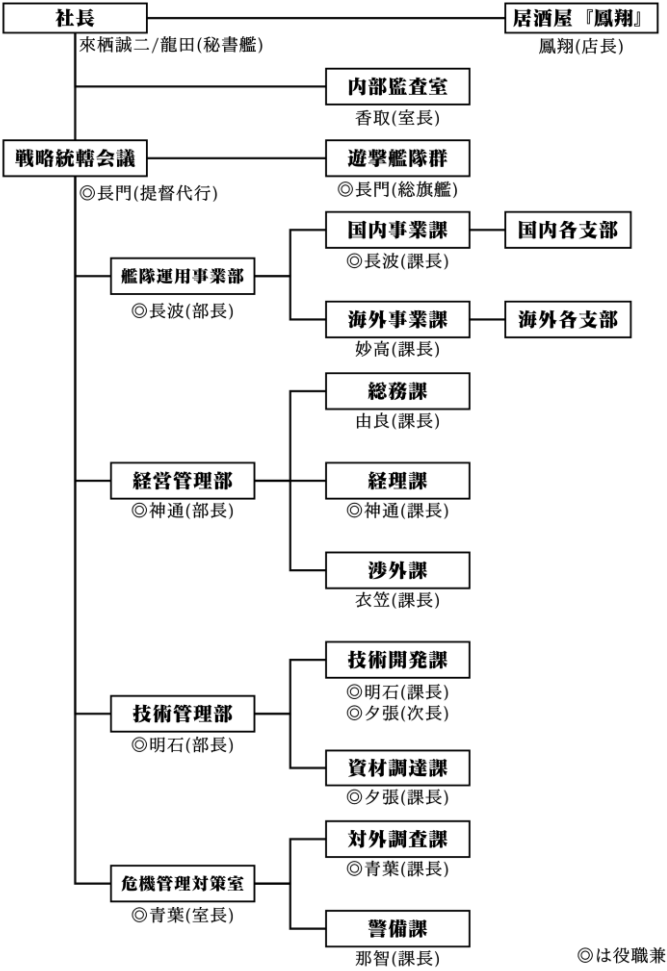
【アイオワ(改)】
アメリカ海軍の艦娘、第 13 任務部隊の旗艦

【サミュエル・B・ロバーツ(改)】
アメリカ海軍の艦娘、アイオワの補佐艦

【ジョンストン(改)】
アメリカ海軍の艦娘、第 13 任務部隊の一員

【他一名】
サラトガ(Mk.II)

民間軍事会社『海神』組織図 （2019年12月現在）



「やっと会えた！　陽炎よ。よろしくねっ！」

第五章　瘴霧の魔物

1

「姉さんッ！」

「えっ？」

振り返る間もなかった。不知火に突き飛ばされ、陽炎は慌てて両足の舵を切り返し、転倒を免れる。いったい何が？　その場で顔を上げた途端、眼前の海原が爆ぜた。

白波の巨柱が高々と噴き、不知火を飲み込む。華奢な身体が宙を舞い、大小の鉄片と鮮血を撥ね飛ばした。やがて羽を捥(も)がれた蝶のごとく真っ逆さまに波間へ落ちる。

陽炎は、小雨めいた潮水を浴びて立ち尽くした。

「……不知火？」

噎せるような血臭が鼻腔を刺激する。陽炎は不安のあまり全身に嫌な汗をかきながら

不知火のほうへ駆け寄った。最悪な事態ばかりが頭の中を駆けめぐる。力なく横たわる妹艦（いもうと）を見て、想定していた最悪が限りなく現実に近いものだったとわかった。

右耳のイヤホンから、霞と朝潮の切迫した声が聞こえてくる。

『雷撃されたわッ！　不知火が重傷ッ！』

『雷撃っ⁉　位置は！』

『不明！　とにかく重巡棲姫（アイツ）から距離を取って！』

『……十一時方向……雷跡多数！』

『新手までっ⁉　いったいどこから！』

『考えるのは後にしなさいったら！　後退急げッ！』

正体不明の雷撃は、足部艤装に加えて、不知火の背負った艤装本体に止めを刺した。連戦で脆くなった装甲を貫き、機関部へ致命傷を与えている。飛び散った破片は凶器となり、太腿や左右の上腕、首筋を傷つけた。無数の食い込んだ破片を伝い、夥しい量の血が溢れている。どれが原因かはわからないが、不知火はピクリとも動かない。

陽炎は震える手で不知火を抱き起こした。

「……」

たちまち両腕が真っ赤に染まる。

ポタポタとこぼれ落ちる命が波紋を広げた。

不知火の両目はうっすら開いている。自分と変わらない小柄な身体のどこに詰まっていたのかと、驚くほどの出血だった。藍鉄色の海は赤黒く濁り、血の気の失せた肌から温もりが奪われてゆく。不知火の虚ろな瞳がこちらを静かに見つめていた。

「――っ！」

どんどん腕の中で身体が冷たくなってゆく。傷口を懸命に押さえても流れてゆく血は一滴も減らない。あまりにも突然で、どこまでも理不尽な死が迫っていた。

「不知火っ！　しっかりしなさい、不知火っ‼」

このままでは助からない。仲間の最期を嫌というほど見てきたからわかる。

陽炎が怯えた子供のごとく頭を振った。

「……あ……あぁ……嫌ぁ……」

後悔と罪悪感で押し潰されそうな心が悲鳴を上げる。至近弾の水飛沫を浴びながら、陽炎は力なく座り込んでしまった。どうして？　そんな言葉が口をついて出た。

私があんたを守る。そう約束したのに――。

「陽炎ッ！」

いきなり襟首を掴まれ、容赦ない平手打ちで右頬を打たれる。

煤汚れの目立つ顔で、霞が眦を吊っていた。

「バカ！　ここで沈みたいのッ!?」

「……えっ？」

気づけば、朝潮らが正面へ展開していた。濃い霧から溢れ出る新手に押されつつも、ギリギリで食い止めている。主砲の弾倉を交換し、朝潮は苛立ちを滲ませた。

「霞！　長くは持たないですよ！」

「わかってるわよ！　ほら、そこを退きなさいったら！」

陽炎を強引に押しやり、霞は戦闘用ベスト（チェストリグ）から医療キットを取った。呆然としている陽炎の左肩へ手が置かれる。霰が、目深に被った鉄帽の下で頷いた。

「……心配しなくても……大丈夫……」

彼女の言葉通り、霞の応急処置は的確だった。

まず止血帯（CAT）で太腿の付け根を縛ると、患部の破片を可能な範囲で取り除き、それから止血剤入りのガーゼと包帯で覆う。左右の上腕は止血ガーゼを当てたのち、圧迫包帯と伸縮包帯で二重巻きにする。首筋は破片を避け、ガーゼと包帯で処置を施した。

霞が険しい表情で舌打ちをする。

「……バイタルが弱いわ。艤装の分離は……ここじゃ無理か」

戦闘中の曳航は困難を極める。余計な物を捨てて、移動速度を少しでも上げたいのが本音だろう。この奇妙な濃霧の中となれば尚更だ。どこから現われるかも判らない敵を警戒しながら、重体の艦娘を曳航するとなれば、全滅のリスクは一気に高まる。

陽炎は悄然とした表情で項垂れる。

「そんな……じゃあ、不知火は……」

曳航不能と判断された艦娘に残された選択肢は一つしかない。

――雷撃処分。戦場で行動不能となった艦娘に与えられる慈悲である。

霞が両眼に怒気を湛えた。

「……ったく。なんて顔してるのよ」

医療キットを片付けると、己の右肩を貸すように不知火を担いだ。

「絶対に連れて帰るわ。だから、あんたも手伝いなさい！」

陽炎も慌てて不知火の右側を支える。朝潮らは輪形陣を敷き、霞の合図で急速離脱を始めた。しかし、深海棲艦も手負いの獲物をあっさりと見逃すほど馬鹿ではない。

朝潮が陣形後方で怒鳴った。

『魚雷が来ますッ！　七時方向ッ！』

霧で見えにくいが、雷跡は全部で五つ。霞の決断は素早かった。

「面舵いっぱい！　最大戦速で回避！」

陽炎は両足の舵を右へと切った。舵のエッジが海上を切り裂き、白波の半円を描く。四本、五本、と標的を捉え損ねた魚雷が通り過ぎた。雷撃の回避は、いかに早く魚雷を発見できるかで決まる。位置と進路が判明したら、あと射線上から逃れるだけだ。

朝潮が息を呑んだ。

『そんなっ!?　四時方向からもっ!?』

霞が振り向き、陽炎は戦慄した。右斜め後ろだった。うっすら白んだ海原を疾走した陰影が見える。距離四〇〇メートル。目を凝らしてやっと判るような薄い雷跡――。

着弾まで十秒もない。瞬間、小柄な影が陽炎を守るように割り込む。

「満潮ッ！」

霞の声を掻き消し、骨身を砕くような衝撃が水面を穿った。大量の波飛沫と衝撃波をぶつけられ、陽炎は思わず右腕で顔を庇う。砲煙と霧の向こうで人影が動いた。

満潮は、右の足部艤装から大量の火花を散らしていた。

「……ちっ。面白いことしてくれたじゃない」

直撃寸前、満潮は主砲で海面を撃っていた。着弾衝撃で水中を荒らし、魚雷の進路を逸らすためだ。だが水上を跳ねた砲弾は魚雷を穿ち、至近距離で爆発を起こした。

霞は胸を撫で下ろし、陽炎が慌てて尋ねる。

「満潮っ⁉　あんた、大丈夫なの⁉」

左足の浮力だけでは航行能力が著しく低下する。戦闘はもう無理だ。

「ふん、どうってことないわ。それより急いだほうがいいんじゃない？」

正論だった。一時は遠ざかった砲声が徐々に近づいている。

霞が主砲を持ち直した。
「陣形このまま！　一気に離脱するわよ！」
了解！　各々の返事を合図に第四戦速で東へ向かう。恐らく、初春達を先に回収した〝海神〟は海域の手前にいる。不知火の体力が合流まで持つか否かが問題だ。
陽炎は祈るように囁いた。
「……頑張るのよ。お姉ちゃんも頑張るから」
キッと前を見据え、深く息を吸い込む。
「霞！　ギリギリまで速度を上げて！　大急ぎよ、大急ぎ！」

第六章　不知火

5

意識の片隅で波の音が聞こえた。手足が鉛を詰め込んだように重たい。でも、全身を心地良い浮遊感が包んでいた。真っ暗な闇の中で、ちゃぷちゃぷと揺られている。

時折、おぼろげな声が聞こえてきた。

「――――っ！」

はっきりと聞こえない。でも、自分を呼んでいる気がした。

腹の底を突き上げるような震動を感じる。そっか。ここはきっと――。

「陽炎姉さんっ！」

両目をカッと見開き、陽炎は意識を取り戻した。ゴムを焼いたような異臭に加えて、濃密な血臭が鼻腔を刺激する。ぼやけた視界のピントがようやく合ってきた。

曇天を背にして、こちらを覗き込む顔がある。

「……しら……ぬい？」

不知火が泣きそうな顔で安堵した。

「意識が戻ったようですね。動けますか、姉さん？」

「……何とかね」

「すぐ敵の増援が来ます。私の肩に掴まってください」

正直、何が起きたのかわからない。撤退支援の最中、小規模な敵群から奇襲を受けたところまでは覚えている。旗艦の指示で徐々に後退しながら迎撃していたはずだ。

不知火の右肩を借りて立ち上がる。

「……頭がぼんやりする」

「砲撃の余波をまともに受けたせいです。小規模な敵群でしたが、戦艦ル級が混じっていましたから。子日、白雪は轟沈（KIA）。姉さんは衝撃で吹き飛ばされたようですね」

「……あぁ……思い出したわ」

一瞬の出来事だった。突然、鼓膜を殴りつけるような砲声が轟き、前衛の〝子日〟を跡形もなく消し飛ばした。彼女の血を浴びた〝白雪〟も振り返る間際で散った。

そこで巻き込まれたらしい。殴られたような衝撃で意識を奪われた記憶はある。

陽炎は、不知火に支えられて移動を始めた。

「ひどいわね……」

「ええ」

どこもかしこも屍で埋め尽くされている。炎の燻る残骸から黒煙がたなびき、油膜に包まれた肉塊と鉄片で海は満杯だった。駆逐級の死骸が大半だが、人間あるいは艦娘と思われる死体も多い。誰かの千切れた腕が、持ち主を探して哀しく彷徨っている。

呉訓練所を卒業して早六年。陽炎と不知火は、南方方面の最前線を渡り歩いていた。

「不知火。あんたは大丈夫？」

「掠り傷だけです。問題ありません」

「そっ。良かった……」

お互い五体満足だが、制服や艤装はボロボロだ。もっとも、ここ最近は傷を負わずに帰還できた日が一度もない。だが、最期の言葉も遺せずに沈むよりはマシだった。

陽炎は今更ながらに思った。

「そういえば、五十鈴さんは？」

指揮を執っていたのは、長良型軽巡の五十鈴だ。タウイタウイ泊地の第三十一戦隊を率いている彼女は、損耗の激しい南方では貴重なベテランの艦娘である。

不知火は苦い顔つきで事実を述べた。

「私たち以外は全滅。彼女は……雷撃処分しました」
「……了解。仕方ないわね」
この二年で味方の全滅を何度も味わった。今日まで一緒だった僚艦が、明日の出撃で轟沈するなど珍しくもない。投入される戦力は圧倒的に少ないが、伸びきった補給線は死守しながら、深海棲艦へ制圧された南方方面の制海権を奪い返せと迫られる。
新入りもベテランも関係ない。皆、無茶な命令で海の藻屑となった。

――ここは地獄だ。希望を失ったパンドラの箱と変わらない。

今から二年前、帝國海軍の快進撃は〝第三次反抗作戦〟の大敗でストップした。
帝國海軍が〝払暁作戦（オペレーション・ダウンアタック）〟と命名した三度目の反抗作戦は、日米共同作戦の体を取りながら、日本側がイニチアシブを握っている歴史上初の作戦でもあった。
この反攻作戦の最終目標はハワイ諸島の奪還だ。ウェーク島奪還を第一段階として、第二段階のミッドウェー島を奪還したら、敵の一大拠点であるハワイを攻略する。

ところが、第三次反抗作戦は開始から三時間で中止を余儀なくされた。
カロリン諸島、パラオ、グアム、サイパン、フィリピンが一斉攻撃され、反抗作戦で手薄となった現地の守備隊は、大挙する数十万の敵群に為す術もなく鏖殺された。
大規模侵攻の勢いは凄まじく、本土侵攻も時間の問題と言われていた。
そこで、帝國海軍は沖ノ鳥島に防衛ラインを構築。日米のハワイ攻略部隊に加えて、本土からの増援を合わせた連合軍で敵群の侵攻を食い止めようとした。
だが敵群の飽和攻撃に耐えきれず戦線は崩壊。帝國海軍が最前線で潰走していた頃、アメリカ海軍は後方から撤退を始め、帝國海軍ごと核攻撃で敵群を一掃した。
結果、帝國海軍は無視できない損害を受け、海軍戦力はおろか補給物資まで不足する危機的な状況となり、国内メディアが「国防の危機！」と叫ぶ事態へと陥った。
この〝沖ノ鳥島攻防戦〟を経たのち、南方方面は撤退と侵攻を繰り返している。
不知火が沈んだ声色で謝った。
「……すみません。姉さん」
「ん？　何が？」
「無事帰還できてもまた……」

「いいんじゃない？　次の転属先が楽しみね」
「ですが……」
「もぅ。あんたのせいじゃないわよ」
訓練所を卒業後、二人揃って呉鎮守府へ配属された。四年間、鎮守府で多忙ながらも平穏な日々を送ってきたが、二年前の戦力再編で状況はがらりと変わってしまった。
生きるか死ぬか。訓練所の席次など意味を持たない死地で戦い続ける日々――。
この泊地で転属は四回目だが、またもや悪運が発揮されたようだ。帰還の数日後には転属命令が下るだろう。転属命令という名目の厄介払い。早い話が追放である。
泊地司令が報告書を読んで皮肉る姿が目に浮かぶ。
――『また味方を沈めたか。まったく大した戦果だな』
一度目は「よく戻った」と褒められ、二度目は「幸運だ」と喜ばれ、三度目になると不気味さを感じる。仲間達は疑念の眼差しを向け、二人のことを陰で噂した。

――『あの二人は味方を弾除けに生き残る。味方殺しの卑怯者』

どこの泊地もそうだった。結局、信用できる相手は不知火だけだ。

陽炎は不敵に笑って見せた。

「不知火。あんたの傍には私がいるでしょ？　どこに行っても守ったげるから！　ってこんな状態で言っても説得力ゼロよね～。あはは……」

「……また、味方殺しと呼ばれるのでしょうね」

「かもね。だから、これからは私が代わりに――」

不知火が言葉を被せるように遮った。

「この先も味方殺しの汚名と辛さは私が背負います。だから姉さんは……姉さんだけは変わらないでください。それから一つだけお願いがあります」

陽炎を真っ直ぐ見つめ、不知火は縋るように求めた。

「……不知火（わたし）を残して沈まない。そう約束してください」

「不知火……」

「私を変えたのは姉さんです。ちゃんと責任を取ってください」

「……」

訓練所の演習で勝った日から、不知火も少しずつ変わってきた。ポーカーフェイスは相変わらずでも、今は自分の気持ちや感情を素直に伝えてくれるようになった。

その成長を愛おしく感じるようになったのはいつからだろう？

陽炎は、不安に揺れる不知火の瞳へ微笑んだ。

「あんたを残して沈まない。約束する」

「本当ですか？」

「大丈夫。お姉ちゃんを信じなさい」

不知火の頭を優しく抱き、陽炎は胸中で呟いた。

――大丈夫よ、不知火。私があんたを守るから。

本編へと続く

黒猫機関

カッコイイを創造する同人小説サークル

KANTAI COLLECTION FANBOOK

SHADOW FLEET 4

－ 瘴霧の魔物（下）－

黒ねこ作

表紙・挿絵／ただのサボテン

C97 コミックマーケットで頒布予定！！

『黒猫機関』

黒猫機関
KURONEKO KIKANN

https://www.kuronekokikann.com

本やサンプルの感想、ご意見等も歓迎です！
ホームページや著者の Twitter 等に送っていただければ幸いです！

KANTAI COLLECTION FANBOOK

SHADOW FLEET 4

－ 瘴霧の魔物（上）－

発行者：黒猫機関
HP：https://www.kuronekokikann.com
Email：projectblackcat2011@gmail.com

著者：黒ねこ作（@gretelproject）
Twitter：https://twitter.com/gretelproject

イラスト：ただのサボテン（@tdnsbtn）
装丁デザイン：舩木渡（舩木同人ワークス）
編集：黒ねこ作（@gretelproject）

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。